

手紙だけのおつき合い

清野使門・結実子夫妻

*昨今、男女ともなかなか結婚しない風潮があります。結婚するにしても、「同棲してから」とか「できちゃった婚」が当たり前になった感があります。

そんな中、友人に紹介された相手と文通だけで心を通わせ、結婚に至ったカップルがいます。東京都大田区の垂穂キリスト教会のスタッフとして働く、清野使門さん・結実子さんです。

一清野ご夫妻は、二〇〇六年6月の結婚ですから、まだ新婚2年目ですね。結婚に至る経緯がユニークですが、どのように導かれたのでしょうか。その前に、いつどのように信仰を持たれましたか。

使門 クリスチャンホームで、洗礼を受けたのは小学校2年生ですが、「本当に生まれ変わったのは20歳」です。母の家系で言えば、五代目のクリスチャンになります。

結実子 うちも両親がクリスチャンで、15歳の時に洗礼を受けました。

一お二人は、それぞれ伴侶に出会う前に恋愛経験はありましたか。

使門 僕の場合は、幸か不幸か「つき合った」と言えるような経験はないんですが、片思いと言うか、思いを寄せる程度は、中学くらいからありました。女性を思うことから来る力が「人生の柱」みたいなところがありました。中学生なのに人生の半分は女の子、もう半分はバンドでした。勉強のほうは……まるでない（笑い）。

そういうわけで、心はそちらに向いていたんですが、うまく行かず、一度も

「恋人同士」にはならず終わりました。

結実子 私は大学生の時、一人だけ相手がおりました。でも、短かったです。

恋愛沙汰に巻き込まれるのがイヤになってきて、「誰かのステディーになったりすると、ややこしくないかな？」っていう感じで、今から思えば不純な動機でした。

一お二人は、家庭や教会で、結婚とか性について教えられてきましたか。

使門 僕はほぼ100%、本から独学。

結実子 へーえ！

一役に立つ本はありましたか。

使門 1冊、エリザベス・エリオットの『情熱と純潔』（いのちのことば社、現在は品切れ）が決定的でした。最初は「恋愛指南書かな？」と思って読んでんですが、むしろ信仰というものを教わりました。

「信仰と男女のことは、別々のものではなくて、すごく近い距離にあるんだ」ということ。この二つが重なり合っていることが分かったのが、僕にとっては決定的でした。それこそ本がボロボロになるまで読みました。

一その本は、自分で探したものですか、それともご両親からのプレゼントですか？

使門 自分で買ったように思います。そう言われて考えてみると、本らしい本はそれくらいですね。その代わり、5年くらいに渡ってこれでもかというくらい読みました。

要旨は、「男女の関係を通して、神さまに栄光を帰すことができる」ということだと僕は受け取っています。エリオットさんの言うことすべてに賛同して

いるわけではないんですが。

一ということは、家庭や教会で、恋愛について教えられた記憶はないということですか。

使門 そういう記憶はないですね。

結実子 私も、家ではないですね。

独身時代は、神奈川県平塚にある教会に通っていたんですが、教団の青年キャンプなどで、結婚セミナーという時間が必ずありました。そこで、講師の先生がメッセージとは関係なく、ご自分の結婚生活を語ってくださったのが、私にとっては大きかったです。

先生が、性、夫婦、結婚、家庭について、また時には奥様も加わって、ご自分たちの体験から語って下さいました。メッセージそのものより、先生のホンネの話をよく覚えているくらいです。

一独身の時、お二人は結婚についてどんな夢を持っていましたか。

使門 僕にとって、結婚とは人生で一番大きなものという意識でした。ところが、結婚直前の1、2年は、結婚のことは一番考えていない時期でした。

いろいろあって、結婚が自分にとって偶像になっていたことに気づいたんです。結婚にあこがれや希望を持つのはいいんですが、それが強すぎて大切なところに力を使えない自分であることに気づきました。24歳から25歳の時です。それは、第二のボーン・アゲイン（新生）です。

それで、結婚はどうでもよくなって、むしろ独身の賜物のすばらしさに目が開かれました。そんな時に家内を紹介されたんです。

（以下省略）